

# 仏典を読む (八)

## 死生と「範例」性

清水毅四郎

不意の夜襲をうけて臨終をむかえた父の最後の教誡が、当時九歳の少年であった法然上人の脳裏に深く刻印され、年令とともにその印象（への思索）がふくらみ、その後の人生遍歴における廻心の重要な転機となっていた、という（塚本善隆「法然・一遍」日本思想大系月報9 一九七一）。身近な人の死に遭遇してショックを受けながらも、そこから立ちなおるべく生きぬいていこうとする思索には、人をしてなみなみならぬ深い世界につき進ませる場合が多いようである。

また周知の、仏陀の前身である太子悉達多の「四門出遊」は、具体的な事例（老人・病人・死・出家）を知ることが、それ以上のこと（深い世界）を知り、廻心の機縁につながった典型的な例である。老人、病

人、死、出家などの事例そのものが常に「範例」になるとは限らない。あくまで太子の内面とのかかわりにおいて、「範例」になりえたのである。教育方法学では、そのように、具体的な事例がまさに「範例」となりうるには、教材構成や学習者の内面にどのような要件が満たされてこなければならぬか、ということをも考究しようとする（実際に三枝孝弘著『範例方式による授業の改造』という本も十年ほど前に出版されている）。すぐれて一回的性格の強い授業や講義において、教師は児童、生徒、学生に「範例」性を生じさせるためにどう実践指導をするのか問われている。ごくふつうの子が、ある日ある時の授業の教師、教材、仲間集団等が契機となって、人間の生き方や世界に深く眼を向けていくようになるということは少なくないのである。次の文は小学校六年生のある児童が、芥川龍之介『くもの糸』の勉強をしていきながら書いた感想文の一部である（日比裕著『授業における創造性研究』参照）。

『くもの糸』を読んで

三枝真理子

（前略）人間とは、なんとあわれなものなのでしょう。芥川も、人間の理想はどんどんふくらんでいくことを知っていたことでしょう。それなのになおかつ理想の世界を求め、まわりの人間を見て軽べつ

し、また、自分もそのなかまであることをくやみ、悲しみ、とうとう自殺に追いこまれてしまったのでした。芥川は、この作品をとおして、人間を軽べつすると同時に、私たちになにかを知ってもらいたかったのではないのでしょうか。なにかとは、人間とは少しでも欲望や利己心を消さなければいけない。少しでも多く利他心を持たなければいけない。また、欲望や利己心の犠牲になって、自分で自分を殺すようなことをしてはいけない。というようなことではないのでしょうか。最後に、「くもの糸」について考えてみました。地獄と極楽が一つのものであることを証明しているとも考えられるし、現実の世界へ行く人間がすがりついているものとも考えられます。私は『くもの糸』で、まだ、「くもの糸」についての芥川の心を知ることとはできません。

この文を引用して著者は「読みとりが六年生の子どものまさしく力いっぱい追求になっている。教育というものの奥深さを思わずにはいられない。それは、毎日の、ねばり強く徹底したかしみたところあたりのまへの教師の活動から生みだされてくるものである。

(中略)そしてこの子どもたちを前にして、これ以後の子どもの追究の過程をどう指導していけばよいのかを考えると、教育というものに一種の戦慄を感じざ

るを得ない。」と述べる。

人間界の出来事において、人の「死」は最も「範例」性を生じやすい事例のひとつであろう。人間は「死」を考えることなしに生きられぬ存在である。「死」を通して人間は「いかに生きるか」を問いなおす。宗教は死生の問題に最も深くかわるが、教育においてもまた、生き方を根源的につきつめるところでは「死」の問題をさけることはできないであろう。私は浄土に憧憬し極楽往生しようとする捨身の傾向にみるとく、仏教は死をみつめ、死と対して生を問いなおすというよりも、むしろ死への恐怖をやわらげて死との対決をずらす働きをしてきたのではないかと思ってきた。が、法然上人が師とあおいだ善導大師の本意は、「死の生」をふまえた無常感、懺悔の心であった、と受けとめるべきだという(水谷幸正著『善導大師の本意』中外日報社)。仏教における死生観に少し関心がでてきたが、門外漢の私には歯がたちそうにない思いもする。自分自身の実践、生き方、考え方との対応を自覚的に確かめながら問題にする意識がともなわないまま「仏教精神」云々を含めて仏教用語を軽々しく口にすることは、みずからの空虚の度を増していくだけのように、現在の私には思われる。